

名士と山水

東西洋の山川觀(下)

黒田清輝君談

▲山水の盛衰 夫れから或る年の秋徐々霜せうくの下りる頃……輕井澤から霧積と云ふ所に遊んだことがあります、丁度夜になつて聞くもなりますし、山の□□を上ツたり下りたりして漸やく燈火ともしびを認めて人家のあるを知り、辿つて行つて見ると多くは腐朽りになつた家で、人の住つて居るのは僅か一軒丈でした、其所で漸く宿舎を聽いて其山奥の温泉宿に泊りました、此所は二十四五年の頃までは全盛を極めたものだと言ふ、成程函嶺ほこねや日光では鳥渡見ちよいとられない所もある、溪流を挟んで兩岸に紳士の別荘もあつて、紅葉の季節杯は別して奇觀絶勝であらうと思はれる、併し境域が狭いのと鑛泉が出なくなつたので今では斯様に凋落したものと見えます、

▲酒を賣らぬ宿屋 此鑛泉は何に利目があるか知れませぬが、百姓見た様な者が泊つて居ましたが、其浴槽を窺へば、石を抱いて夜中這入つて居る、そろ／＼寒くなる時分でもあらうが首丈出して四肢は残らず槽中に没して居つた、此家の主人は基督教信者で、庭には耶穌の碑が樹つてあつて酒は賣らなかつた、斯る山家に耶穌の碑、禁酒の宿屋……面白いですな、

▲山海生活と工風 之を要するに海上は板子一枚下は地獄と云ふ觀念を有ち長い航海でもするときは全く身を天と水との趣味を味ふ丈で陸かのことなどは頓と忘れて仕舞ふ所に妙味がある、勿論思つても駄目ですからな、況や愉快なる船友のあるあれば談笑自適之に反して山住居となると餘程工風の積んだ人でなければ耐えない様に思ふ

のです。

▲畫家と支那の山水　そこで山水などを描く人は如何しても一遍は支那を觀て來なければいかぬと思ふ、文人畫などは尙更です、山の絶頂に岩石の突出した所だの、妙に空惚けた袖の長い人間が驢馬に騎ツたり輓いたりして居る所は支那畫其儘のやつがあるのです、左れば支那畫を土臺として研究して居る人は是非一度は觀て來なければ眞當のものは描けぬだらうと思ふのです。

▲胡角望郷の景　私は日清戰爭の當時從軍して遼東半島から山東省の一部分を跋^あ歩き彼の邊の風俗を見ると餘程面白い所があるのです、極く詰らない所でも楊柳河邊に土壁の家の點々散在したり、金州邊で寒風のヒユウヒユウと吹く中を邊疆謫遷の將軍が馬上胡角の音を聞いて望郷の念切なる光景など流石に支那の詩は驚くべき實景實感を描寫したもので畫家の技と相待ツて面白く感じました。

『中央新聞』明治四〇年八月二〇日

本文献中の「ロッチの書物中殊に有名な」愛蘭土の漁師」とは、フランスの小説家ピエール・ロチ(Pierre Loti)八五〇(一九一三年)の『氷島の漁夫』(Pêcheur d'Islande)八八六年刊)を指す。海軍士官でもあつたロチは来日経験もあり、『お菊さん』(Madame Chrysanthème)八七年刊)等の日本を題材とした小説でも知られているが、ロチが『フィガロ・イリュストレイ』(Femmes Japonaises)、フランス留学中であつた黒田は八点的挿絵を寄せている。この挿絵については、関千代「黒田清輝の挿絵——「フィガロ・イリュストレイ」に載つた」(『絵』一八三昭和五四年五月)を参照。

北海道と欧米の景が似ているという感想は、フランス留学から帰国した翌年の明治二十七年に、黒田が北海道を旅行した折に抱いたもので、五月二十六日の日記にも「此の北海道と云処ハどうも西洋に似て居る」とある（『黒田清輝日記』第二巻）。また同じく日記によれば、黒田が霧積温泉を訪れたのは、明治三四年一月三三、三四日のことである。